

走れメロス

太宰 治：作

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐(じゃちぼうぎやく)の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して來た。けれども邪惡に對しては、人一倍に敏感であつた。けふ未明メロスは村を出發し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやつて來た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内氣な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律氣(りちぎ)な一牧人を、近々、花婿として迎へる事になつてゐた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆゑ、花嫁の衣裳(いしやう)やら祝宴の御馳走(ごちそう)やらを買ひに、はるばる市にやつて來たのだ。先(ま)づ、その品々を買ひ集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬(ちくば)の友があつた。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしてゐる。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢(あ)はなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いてゐるうちにメロスは、まちの様子を怪しく思つた。ひつそりしてゐる。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは當りまへだが、けれども、なんだか、夜のせみばかりでは無く、市全體が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつて來た。路(みち)で逢つた若い衆をつかまへて、何かあつたのか、二年まへに此の市に來たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑(にぎ)やかであつた筈(はず)だが、と質問した。若い衆は、首を振つて答へなかつた。しばらく歩いて老爺(らうや)に逢ひ、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。老爺は答へなかつた。メロスは兩手で老爺のからだをゆすぶつて質問を重ねた。老爺は、あたりをはばかりの低聲で、わづか答へた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「惡心を抱いてゐる、といふのですが、誰もそんな、惡心を持つては居りませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣(よつぎ)を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「おどろいた。國王は亂心か。」

「いいえ、亂心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、といふのです。このごろは、臣下の心をも、お疑ひになり、少しく派手な暮らしをしてゐる者には、人質ひとりづつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。けふは、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「呆(あき)れた王だ。生かして置けぬ。」

メロスは、單純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそ王城にはひつて行つた。たちまち彼は、巡邏(じゅんら)の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懷中からは短劍が出て來たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであつたか。言へ！」暴君デイオニスは靜かに、けれども威嚴を以て問ひつめた。その王の顔は蒼白(さうはく)で、眉間(みけん)の皺(しわ)は、刻み込まれたやうに深かつた。

「市を暴君の手から救ふのだ。」とメロスは惡びれずに答へた。

「おまへがか？」王は、憫笑(びんせう)した。「仕方の無いやつぢや。おまへには、わしの孤獨がわからぬ。」

「言ふな！」とメロスは、いきり立つて反駁(はんぱく)した。「人の心を疑ふのは、最も恥づべき惡徳だ。王は、民の忠誠をさへ疑つて居られる。」

「疑ふのが、正當の心構へなのだと、わしに教へてくれたのは、おまへたちだ。人の心は、あてにならな

い。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて呟(つぶや)き、ほつと溜息をついた。「わしだつて、平和を望んでゐるのだが。」

「なんの爲の平和だ。自分の地位を守る爲か。」こんどはメロスが嘲笑(てうせう)した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

「だまれ、下賤(げせん)の者。」王は、さつと顔を擧げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言へる。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまへだつて、いまに、磔(はりつけ)になつてから、泣いて詫(わ)びたつて聞かぬぞ。」

「ああ、王は惻巧(りかう)だ。自惚(うぬぼ)れてゐるがよい。私は、ちゃんと死ぬる覺悟で居るのに。命乞(いのちご)ひなど決してしない。ただ、――」と言ひかけて、メロスは足もとに視線を落し瞬時ためらひ、「ただ、私に情をかけたいつもりなら、處刑までに三日間の日限を與へて下さい。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を擧げさせ、必ず、ここへ歸つて來ます。」

「ばかな。」と暴君は、嘎(しはが)れた聲で低く笑つた。「とんでもない嘘(うそ)を言ふわい。逃がした小鳥が歸つて來るといふのか。」

「さうです。歸つて來るのです。」メロスは必死で言ひ張つた。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の歸りを待つてゐるのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスといふ石工がゐます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行かう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに歸つて來なかつたら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ。さうして下さい。」

それを聞いて王は、殘虐な氣持で、そつと北叟笑(ほくそゑ)んだ。生意氣なことを言ふわい。どうせ歸つて來ないにきまつてゐる。この嘘つきに騙(だま)された振りして、放してやるのも面白い。さうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも氣味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑(たくけい)に處してやるのだ。世の中の、正直者とかいふ奴輩(やつばら)にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願ひを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日日には日沒までに歸つて來い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。ちよつとおくれて來るがいい。おまへの罪は、永遠にゆるしてやらうぞ。」

「なに、何をおつしやる。」

「はは。いのちが大事だつたら、おくれて來い。おまへの心は、わかつてゐるぞ。」

メロスは口惜しく、地團駄踏(ぢだんだふ)んだ。ものも言ひたくなくなつた。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君デイオニスの面前で、佳(よ)き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言で首肯(うなづ)き、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンティウスは、繩打たれた。メロスは、すぐに出發した。初夏、滿天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、翌(あく)る日の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事をはじめてゐた。メロスの十六の妹も、けふは兄の代りに羊群の番をしてゐた。よろめいて歩いて來る兄の、疲勞困憊(ひらうこんぱい)の姿を見つけて驚いた。さうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い。」メロスは無理に笑はうと努めた。「市に用事を殘して來た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまへの結婚式を擧げる。早いほうがよからう。」

妹は頬(ほほ)をあからめた。

「うれしいか。綺麗(きれい)な衣裳(いしやう)も買つて來た。さあ、これから行つて、村の人たちに知らせて來い。結婚式は、あすだと。」

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ歸つて神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらゐの深い眠りに落ちてしまつた。

眼が覺めたのは夜だつた。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。さうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出來てゐない、葡萄(ぶどう)の季節まで待つてくれ、と答へた。メロスは、待つことは出來ぬ、どうか明日にしてくれ

給へ、と更に押してたのんだ。婿の牧人も頑強であつた。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やつと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、眞晝に行はれた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆ひ、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すやうな大雨となつた。祝宴に列席してゐた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい氣持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも忪(こら)へ、陽氣に歌をうたひ、手を拍(う)つた。メロスも、満面に喜色を湛(たた)へ、しばらくは、王とのあの約束をさへ忘れてゐた。祝宴は、夜に入つていよいよ亂れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く氣にしなくなつた。メロスは、一生このままここにゐたい、と思つた。この佳(よ)い人たちと生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままたらぬ事である。メロスは、わが身に鞭打(むちう)ち、つひに出發を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに出發しよう、と考へた。その頃には、雨も小降りになつてゐよう。少しでも永くこの家に愚圖愚圖(ぐづぐづ)とどまつてゐたかつた。メロスほどの男にも、やはり未練の情といふものは在る。今宵(こよひ)呆然(ぼうぜん)、歡喜に酔つてゐるらしい花嫁に近寄り、「おめでたう。私は疲れてしまつたから、ちよつとご免かうむつて眠りたい。眼が覺めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がゐなくても、もうおまへには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまへの兄の、一ばんきらひなものは、人を疑ふ事と、それから、嘘(うそ)をつく事だ。おまへも、それは、知つてゐるね。亭主との間に、どんな祕密でも作つてはならぬ。おまへに言ひたいのは、それだけだ。おまへの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまへもその誇りを持つてゐろ。」

花嫁は、夢見心地で首肯(うなづ)いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、「仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、寶といつては、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になつたことを誇つてくれ。」

花婿は揉(も)み手して、てれてゐた。メロスは笑つて村人たちにも會釋して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだやうに深く眠つた。

眼が覺めたのは翌(あく)る日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三(なむさん)、寢過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出發すれば、約束の刻限までには十分間に合ふ。けふは是非とも、あの王に、人の信實の存するところを見せてやらう。さうして笑つて礫(はりつけ)の臺に上つてやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。身仕度は出來た。さて、メロスは、ぶるんと兩腕を大きく振つて、雨中、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。殺される爲に走るのだ。身代りの友を救ふ爲に走るのだ。王の奸佞邪智(かんねいじやち)を打ち破る爲に走るのだ。走らなければならぬ。さうして、私は殺される。若い時から名譽を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかつた。幾度か、立ちどまりさうになつた。えい、えいと大聲舉げて自身を叱(しか)りながら走つた。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇つて、そろそろ暑くなつて來た。メロスは額の汗をこぶしで拂ひ、ここまで來れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。妹たちは、きつと佳い夫婦になるだらう。私には、いま、なんの氣がかりも無い筈(はず)だ。まつすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆつくり歩かう、と持ちまへの吞氣(のんき)さを取り返し、好きな小歌をいい聲で歌ひ出した。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降(ふ)つて湧(わ)いた災難、メロスの足は、はたと、とまつた。見よ、前方の川を。きのふの豪雨で山の水源地は氾濫(はんらん)し、濁流滔々(たうたう)と下流に集り、猛勢一舉に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵(こつばみぢん)に橋桁(はしげた)を跳ね飛ばしてゐた。彼は茫然(ぼうぜん)と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまはし、また、聲を限りに呼びたててみたが、繫舟は残らず浪(なみ)に浚(さら)はれて影なく、渡守(わたしも)りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のやうになつてゐる。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を舉げて哀願した。「ああ、鎮めたまへ、荒れ狂ふ流れを！ 時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に眞晝時です。あれが沈んでしまはぬうちに、王城に行き着くことが出來なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑ふ如く、ますます激しく躍り狂ふ。浪は浪を吞(の)み、捲(ま)き、煽(あふ)り立て、さうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覺悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覽あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の律大な力を、いまこそ發揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに

飛び込み、百匹の大蛇のやうにのた打ち荒れ狂ふ浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと搔(か)きわけ搔きわけ、めくらめつぽふ獅子奮迅(ししふんじん)の人の子の姿には、神も哀れと思つたか、つひに憐愍(れんびん)を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、對岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のやうに大きな胴震ひを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といへども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけてゐる。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切つて、ほつとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は陽(ひ)の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他には何も無い。その、たつた一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしてゐたのだな。」

山賊たちは、ものも言はず一齊に棍棒(こんぼう)を振り挙げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲ひかかり、その棍棒を奪ひ取つて、

「氣の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙(すき)に、さつさと走つて峠を下つた。一氣に峠を駈(か)け降りたが、流石(さすが)に疲労し、折から午後の灼熱(しゃくねつ)の太陽がまともに、かつと照つて來て、メロスは幾度となく眩暈(めまひ)を感じ、これではならぬ、と氣を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、つひに、がくりと膝(ひざ)を折つた。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天(みだてん)、ここまで突破して來たメロスよ。眞の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまへを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまへは、稀代(きだい)の不信の人間、まさしく王の思ふ壺(つぼ)だぞ、と自分を叱(しか)つてみるのだが、全身萎(な)えて、もはや芋蟲(いもむし)ほどにも前進かなはぬ。路傍の草原にごろりと寝ころがつた。身體疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいといふ、勇者に不似合ひな不貞腐(ふてくさ)れた根性が、心の隅に巢喰(すく)つた。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みぢんも無かつた。神も照覽、私は精一ぱいに努めて來たのだ。動けなくなるまで走つて來たのだ。私は不信の徒では無い。ああ、できる事なら私の胸を截(た)ち割つて、眞紅の心臓をお目に掛けたい。愛と信實の血液だけで動いてゐるこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も根も盡きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きつと笑はれる。私の一家も笑はれる。私は友を欺(あざむ)いた。途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定つた運命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかつた。私たちは、本當に佳(よ)い友と友であつたのだ。いちどだつて、暗い疑惑の雲を、お互ひ胸に宿したことは無かつた。いまだつて、君は私を無心に待つてゐるだらう。ああ、待つてゐるだらう。ありがたう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思へば、たまらない。友と友の間の信實は、この世で一ばん誇るべき寶なのだからな。セリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、みぢんも無かつた。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで來たのだ。濁流を突破した。山賊の圍みからも、するりと抜けて一氣に峠を駈(か)け降りて來たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給ふな。放つて置いてくれ。どうしても、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑つてくれ。王は私に、ちょつとおくれて來い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になつてみると、私は王の言ふままになつてゐる。私は、おくれて行くだらう。王は、ひとり合點して私を笑ひ、さうして事も無く私を放免するだらう。さうなつたら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名譽の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがひ無い。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういつそ、惡徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追ひ出すやうな事はしないだらう。正義だの、信實だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法(じやうはふ)ではなかつたか。ああ、何も

かも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉(かな)。――四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、潺潺(せんせん)、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑(の)んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れてゐるらしい。よろよろ起き上つて、見ると、岩の裂目から滾々(こんこん)と、何か小さく囁きながら清水が湧(わ)き出てゐるのである。その泉に吸ひ込まれるやうにメロスは身をかがめた。水を両手で掬(すく)つて、一くち飲んだ。ほうと長い溜息(ためいき)が出て、夢から覺めたやうな氣がした。歩ける。行かう。肉體の疲勞恢復(ひらうくわいふく)と共に、わづかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名譽を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いてゐる。日没までには、まだ間がある。私を、待つてゐる人があるのだ。少しも疑はず、靜かに期待してくれてゐる人があるのだ。私は、信じられてゐる。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫(わび)び、などと氣のいい事は言つて居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！　メロス。

私は信頼されてゐる。私は信頼されてゐる。先刻の、あの惡魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまへ。五臟が疲れてゐるときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまへの恥ではない。やはり、おまへは眞の勇者だ。再び立つて走れるやうになつたではないか。ありがたい！　私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽(ひ)が沈む。ずんずん沈む。待つてくれ、ゼウスよ。私は生れた時から正直な男であつた。正直な男のままにして死なせて下さい。

路行(みちゆ)く人を押しのけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のやうに走つた。野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駈け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴(け)とばし、小川を飛び越え、少しづつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走つた。一團の旅人と颯(さ)つとすれちがつた瞬間、不吉な會話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかかつてゐるよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走つてゐるのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態(ふうたい)なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸體であつた。呼吸も出來ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向ふに小さく、シラクスの市の塔樓(たふろう)が見える。塔樓は、夕陽を受けてきらきら光つてゐる。

「ああ、メロス様。」うめくやうな聲が、風と共に聞えた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。貴方(あなた)のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でございます。むだでございます。走るのは、やめて下さい。もう、あの方(かた)をお助けになることは出来ません。」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」

「ちやうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かつた。おうらみ申します。ほんの少し、もうちよつとでも、早かつたなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思ひで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめてゐた。走るより他は無い。

「やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平氣でゐました。王様が、ざんざんあの方をからかつて、メロスは來ます、とだけ答へ、強い信念を持ちつづけてゐる様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの爲に走つてゐるのだ。ついて來い！　フィロストラトス。」

「ああ、あなたは氣が狂つたか。それでは、うんと走るがいい。ひよつとしたら、間に合はぬものでもない。走るがいい。」

言ふにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を盡して、メロスは走つた。メロスの頭は、からつぽだ。何一つ考へてゐない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の殘光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合つた。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが歸つて來た。約束のとほり、いま、歸つて來た。」と大聲で刑

場の群衆にむかつて叫んだつもりであつたが、喉(のど)がつぶれて嗔(しはが)れた聲が幽(かす)かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に氣がつかない。すでに磔(はりつけ)の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだやうに群衆を搔(か)きわけ、搔きわけ、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにゐる！」と、かすれた聲で精一ぱいに叫びながら、つひに磔臺に昇り、釣り上げられてゆく友の兩足に、齧(かじ)りついた。群衆は、どよめいた。あつぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは眼に涙を浮べて言つた。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬(ほほ)を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若(も)し私を殴つてくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯(うなづ)き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴つた。殴つてから優しく微笑(ほほゑ)み、

「メロス、私を殴れ。同じくらゐ音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生れて、はじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸(うな)りをつけてセリヌンティウスの頬を殴つた。

「ありがたう、友よ。」二人同時に言ひ、ひしと抱き合ひ、それから嬉(うれ)し泣きにおいおい聲を放つて泣いた。

群衆の中からも、歔歔(きょきょ)の聲が聞えた。暴君デイオニスは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめてゐたが、やがて靜かに二人に近づき、顔をあからめて、かう言つた。

「おまへらの望みは叶(かな)つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信實とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへらの仲間の一人にしてほしい。」

どつと群衆の間に、歡聲が起つた。

「萬歳、王様萬歳。」

ひとりの少女が、緋(ひ)のマントをメロスに捧(ささ)げた。メロスは、まごついた。佳(よ)き友は、氣をきかせて教へてやつた。

「メロス、君は、まつばだかぢやないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛(かはい)い娘さんは、メロスの裸體を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

(古傳説と、シルレルの詩から。)